

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 井伏鱒二『山椒魚』論一赦しの寓話

doi:10.29714/TKJJ.199412.0006

淡江日本論叢, (5), 1994

作者/Author：顧錦芬

頁數/Page：114-128

出版日期/Publication Date：1994/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.199412.0006>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



井伏鱒二『山椒魚』論

—赦しの寓話—

顧錦芬

はじめに

大正末年から昭和初期にかけて長い不遇な習作時代を送った井伏鱒二の文学的課題は既成リアリズム文学を超克し、プロレタリア文学とも新感覚派とも異なるところで如何に自己を表現するかということであった。昭和五年に、『山椒魚』を収録した『夜ふけと梅の花』を新興芸術派叢書の一冊として新潮社から出版し、文壇的地位を確立する。井伏鱒二は新興芸術派に属しながら、古風的、善意の世界、ユーモラス、アイロニカルなどというような独自の個性と作風を持つ。

『山椒魚』は井伏鱒二が大正八年初めて習作のつもりで書いた『幽閉』から質的に変わってきた作品であって、再三の改稿の中、特に一九八五年新潮社版の『井伏鱒二自選全集』の改作が話題を呼んだ。

チェホフの『賭け』からヒントを得て、人間の絶望から悟りへの道程を書こうと思ったが、自分に裏づけがないから書けなかったと自ら語る。⁽¹⁾ にもかかわらず、この動物を擬人化した寓話とも言える短篇小説は多種多様な角度から照射でき、哲理に富んだ意味深いものだと思われる。亀井勝一郎氏が「『山椒魚』はいまもなお井伏さんの全作品の中で最高位を占むるものと思われる。」⁽²⁾ という見解を示し、佐藤嗣男氏もまた「『山椒魚』の出現は自然主義文学の文体の否定・克服の上に立った井伏文学の文体の成立の一環を成す、まさに文学史上のエポックを画す一大出来事であった。」⁽³⁾ という評価を下す。『山椒魚』は象徴性の強い作品なので、読み手の視点も多く成立できる。小品でありながら、空間が大いに広げられる大作である。

先行研究では、主に改稿過程や改作問題やチェホフの『賭け』との比較研究などに焦点が当てられているように見える。本稿では、筑摩書房版の『山椒魚』に賛成する立場で、先行研究を踏まえながら、『幽閉』以来変わらない素材や背景と作品の趣旨に相当かかわる書誌を探究して、『山椒魚』を「赦しの寓話」ととらえるような作品解釈を行なうこととする。

『山椒魚』は『幽閉』から殆ど原型をとどめないまで改稿されたものであるが、素材は変わらない。従って、ウル『幽閉』の成立背景を理解することが、『山椒魚』の理解につながる。

井伏鱒二の中学時代に学校の池に二匹の山椒魚を飼ってあった。同級生と一緒に餌をやったりするのが楽しみであった。

一後に私は早稲田の文科に入って習作時代のころ、山椒魚を主題にして空想で短篇を書いた。無論、宮原と連れだつてよく蛙を与へた山椒魚の図体や、のっそりとしてユーモラスなところを意識に入れながら書いた。生きてゐる化石と云はれるこの動物は、一年や二年は何も食べなくても生きてゐる。⁽⁴⁾

井伏氏が自分で述べたように、この中学時代の山椒魚に関する記憶が作品の素材となった動物とは直接的な繋がりがある。山椒魚とは魚ではなく、両生綱有尾目に属し、いもりに近縁で、形もよく似ている両棲類である。ただ井伏が自分の思いを創造した山椒魚の内に託した時、作品は個の意識を越えて象徴の域に入ってしまった。一方では早稲田大学在学中、片上伸教授との衝突による休学や親友青木南八の突然の夭折や不本意な大学中退などが創作時点の心境を「幽閉」という意識そのもので象徴できるので、『幽閉』を創作した。換言すれば、岩屋は井伏の青春を表現する悲劇の舞台と見てよいのであろう。

『幽閉』を書いた後、昭和三年に片上教授の急死を知った。その結果、『幽閉』の後半に岩屋の中の山椒魚が蛙を幽閉するという重大な加筆がなされて現行の『山椒魚』となる。幽閉の屈託に堪えかねた山椒魚は何の罪もない蛙を自らの屈託を紛らわす手段として閉じこめる。この発想によって『幽閉』の主人公であった井伏山椒魚は一挙に片上山椒魚にすり替えられる。〈もう駄目なようか〉と山椒魚は聞く。〈もう駄目なようだ〉と蛙は答える。〈よほど暫くしてから〉片上山椒魚は最も気になっていたことを口に出す。〈お前は今どういうことを考えているようなのだろうか〉。これに対して、井伏蛙は万感の思いをこめて〈今でもべつにお前のことをおこつてはいないんだ〉と答える。⁽⁵⁾このように井伏は作品に青春生活の心理変化を投射していたことが指摘できるだろう。

生活経験からの反映のほかに、前にも触れたが読書経験からのチェホフの『賭け』によるモチーフも看過できない。

チェホフ（1860～1904）はロシアの作家で、人間観察がすぐれ、人生を鋭くとらえていることなどで、短篇名手として知られている。

『賭け』（1901）の梗概は次のようである。銀行家と弁護士が死と終身禁固について議論した末、銀行家は二百万ルーブル、弁護士は十五年禁固で互いに賭ける。弁護士は終身禁固が死よりましだという意見なので、銀行家の庭の建物で厳重な監視のある幽閉生活を送ることに決まった。弁護士は幽閉生活で、各分野の書物を読んでお金を含んだ地上のいわゆる幸福ははかないものだと思悟り、二百万ルーブルを放棄する。⁽⁶⁾

『山椒魚』は『賭け』からヒントを得たとはいうものの、類似する方面が相違面より少ないのではないかと思われる。『賭け』と『山椒魚』との「幽閉」という状況設定は相通ずる所ではあるが、まず自然的と人為的な幽閉や幽閉する場所から出られるかどうかなどというような所から両作品がかけ隔たっていることが窺える。

佐伯彰一氏も指摘したように、『賭け』の青年主人公は自ら人為的な幽閉をし、いつでも幽閉される場から出られるのに対して、山椒魚は自然の力で幽閉されてしまったし、永遠に出られない運命におかれた。『賭け』の青年主人公は主体的な自己幽閉者である。自らの意志選択によって、自分を閉じこめる道を選んだ。そして、いつでも脱出できる自由の余地は残されながら、あえて意地を張り、頑張りぬくことで、賭けの条件をやりとげようとした。詰まる所は賭け自体が空しく無意味に見えてきたように悟った。一方では、山椒魚は自発的な幽閉者ではなかった。彼の肉体の成長という自然な理由で、岩屋からぬけ出せなくなったに過ぎない。『山椒魚』というドラマを支配し、進行させる力は「賭け」といった自己主張、勝利への意志ではなくて、むしろ背後に隠れた「自然」のほうであろう。⁽⁷⁾

しかも『賭け』の主人公は本を読むことによって意識で宗教的な悟りをした。山椒魚は増大しつつある身体で体験し、蛙のとの和解によって精神的な昇華をし、現実超克した。このような意識と身体での体験の違いも言えるのではないかと思う。

『山椒魚』は「赦しの寓話」であれば、『賭け』は「悟りの小説」と見るのが妥当であろう。『山椒魚』の蛙は罪もないのに山椒魚に岩屋に幽閉させられ、最後に＜いまでもべつにお前のことをおこつてはあないんだ＞という一言は宗教的な境地に至つ

たという悟りの可能性を多少含んではいるものの、悔しくてどうしようもなかったという相手の心理を理解した上での答えであるから、山椒魚の不条理を赦す色彩が濃厚である。ところが、『賭け』の青年は利欲にかれて幽閉されながら、読書によって現実を看破し悟りの境地に入ったので、両作品を「赦し」と「悟り」で解釈してよいだろう。⁽⁸⁾

従って、『幽閉』若しくは『山椒魚』が『賭け』から得たのはただ幽閉という状況設定だと言えるだろう。

二

『山椒魚』は『幽閉』初出以来、一つ以上の版本があるので、本文を論ずる前に書誌としてその成立史を一瞥しておく必要がある。簡略図表を次のようにあげてみる。

年代	事項	
一九一九年	『幽閉』原稿を書く	
一九二三年	『幽閉』～ 『世紀』七月号	
一九二九年	『山椒魚』原型～ 『文芸都市』第十五号	
一九六四年	『山椒魚』流布本～筑摩書房版『井伏鱒二全集』	
一九八五年	『山椒魚』定本～ 新潮社版『井伏鱒二自選全集』	

成立史簡略図表の如く、ウル『幽閉』から新潮社版の『山椒魚』まで「山椒魚」はかなり動いていた。特に『幽閉』からウル『山椒魚』へ変わったのと学校の教科書に載せられ、五十六年間定本と思われてきた『山椒魚』を井伏鱒二が結末の部分削除したのが目立つ。

『幽閉』と『山椒魚』とは冒頭の「山椒魚は悲しんだ」の一文とほか数箇所しか一致しない。しかも『幽閉』は独白的で、岩屋から出られない屈託した気持ちを表していると同時に、現実世界を軽蔑するような気持ちも含まれる。一方では、一種の問題提起でもある。

それに対して、『山椒魚』は対話的、劇的で、出られない悔しさや悲しみなどの心情変化を漸次に見せている。蛙との和解で、対立が緩和する。強い絶望から諦念へと出られない問題が解決される。身体が岩屋から出られたという問題解決ではなく、精神的に現実を超克できたという解決である。

ところで、昭和三十九年筑摩書房版『山椒魚』から昭和六十年新潮社版『山椒魚』へ改作したのは『幽閉』から『山椒魚』への変化ほど大きくなかったが、多大の反響を呼び起こした。改作された『山椒魚』を定本にするかどうかという問題が生じ、教科書にも採用されているため、文壇の話題、文学研究上の問題を越え、社会的な問題にまで発展した。

両『山椒魚』の違いは「小蝦」のことを「彼」から彼女と変え、そして結末の「ところが山椒魚よりも先に、岩の凹みの相手は、不注意にも深い嘆息をもらってしまった。」から以下の部分が削られた。筑摩書房版の中の小蝦も内容から判断すれば、新潮社版で「彼」を「彼女」に改めたほうが適当であることはいうまでもないが、末尾の対話の部分の削除はドラスティックな議論があった。

当時の反響や意見は反発と賛成と両テキスト並存というような三派に大別できるだろう。反発派では、野坂昭如氏の「文学作品というものは、あくまで、これを読む人間との関係によって成り立つとぼくは思う。」⁽⁹⁾という意見をはじめ、古林 尚 氏の「この反問の部分が消滅したのでは、山椒魚と蛙の関係は単なる〈いじめ〉の問題に縮小されてしまい、底が浅くなってしまう。」⁽¹⁰⁾や安岡章太郎氏⁽¹¹⁾などのような読者の観点からの評論がある。もともと文学作品は作家と作品に加えて読者の考察を導入することによってより立体的なものになるはずであるし、私なりの意見もこの派に近い。その理由は本文を論ずる部分に譲りたい。

賛成派では、三好行雄氏の「本文が作者の所有であるか、読者の所有であるかという問題は、いいかえれば作者の介入した本文の成立過程で、読者が本文を選ぶ自由をどこまでもちうるかという問題でもある。(中略)井伏氏はもちろん作者として、『山椒魚』をどのようにも改変する自由をもっているし、自選全集での改稿を氏のなが

く持続した創作活動のひとつの帰結として理解すれば、そこに『黒い雨』の作家のしたたかな覚悟を読むこともできる。」⁽¹²⁾という意見をはじめ、長谷川泉氏⁽¹³⁾や松本鶴雄氏⁽¹⁴⁾のもそれに近い。それから山口実氏も改稿は作品それ自体が動いていくところへ所を得たのであるという意見を持つ。⁽¹⁵⁾

両テキスト並存派では鈴木貞美氏の「これまでの『山椒魚』ではその悲しみの要素が最後の蛙の許しによって緩和され、むしろほのぼのとした気持ちに誘われておわるようになっていた。(中略)しかし、今度の改稿によって、(中略)悲惨な運命をただひたすらに受け止める精神の姿勢が浮かび上がることとなった。」⁽¹⁶⁾というのをはじめ、紅野敏郎氏⁽¹⁷⁾なども似た意見がある。

この改作について、作者自身が新潮社の『井伏鱒二自選全集』第一巻の覚え書にこのように述べる。

一後年になつて考へたが、外に出られない山椒魚はどうしても出られない運命におかれてしまつたと覚悟した。「絶対」といふことを教へられたのだ。観念したのである。

つまり、蛙との意地を張り合うような状況までにしか描かなくても、絶対的な運命が覚悟できるし、どうせ出られないにきまつているので、同伴者をつくった方が淋しくないという意味だろうと思う。或いはそれは作者が年をとるにつれて、世の中は大体赦しや和解や現実受容などなく、ただ悲しみの含む現実に耐えながら生きていくのが常であることを改めて痛感した一種の諦観であるかもしれない。鈴木貞美氏のいわゆる「非情の完成」⁽¹⁸⁾にもあたる。

しかし、このような削除は現実そのものを描くだろうが、作品全体に潤いや慰めがなくなるのに首肯しがたくて、私見を以下で述べることとする。

三、

『山椒魚』は象徴的な寓話であるゆえ、多種多様な観点から作品そのものをとらえることができる。管見に入ったかぎりの先行研究を幾つかあげてみると、中村光夫氏の「井伏鱒二論」に

「氏がこの小さな寓話で表現したかったものは、疑ひもなく、氏自身の精神の人生に対する姿です。どうにも動かしやうのない人生の現実にたいして、虚勢を張りながら無力を自認せざるを得ない、自己の精神の戯画とも云へませう。」⁽¹⁹⁾

とあるような作者にあてたいわゆる作家論的なとらえ方がある。「戯画」という表現が作品のユーモアにも注目した印である。

また創作当時の時代背景に基づいた石崎等氏の「作者自らチェーホフの「賭」の影響を述べているが、当時の知識人の肥大化した自意識の寓意ととれないこともない。」⁽²⁰⁾という見方がある。

それから涌田佑氏の「限定された空間の中の閉塞状況つまり運命によって余儀なくされた不幸一の中であって、主人公がその内なる屈託をどう減じていくか、といった線上に小説が構築されていくという事実を見極めれば容易に納得されるところであろう。」⁽²¹⁾という見方と東郷克美氏の「現実という動しがたい「岩屋」といかに折り合いをつけて、破滅することなく自己を生かして行くかが、彼の最大の課題であった。」⁽²²⁾というのにかなり同感である。

何故なら、岩屋を現実の象徴と見做すなら、現実とは主観的若しくは客観的な苦しみや不幸がつきものである。そして現世に生きる以上は苦しみのつく現実とは離れられないからである。橋本峰雄氏の『「うき世」の思想』にも近い認知が見られる。

—「うき世」がはっきり仏教的色彩に染まるということは、「憂」が自己の死に関係してくることである。生老病死のいわゆる四苦が「憂」の中心にすわってくることである。もともと仏教では「憂」は「苦」のひくい段階のことであった。生死の「苦」の間にあるのが「憂世」なのであった。⁽²³⁾

確かに『山椒魚』の場合は動物を擬人化した寓話ではある。しかし、岩屋という現実に幽閉された山椒魚の心情変化によって、人間が不幸への受容そして赦して現実を超克するという重要な人生の課題を作品に投影したように思われる。

「何たる失策であることか！」

と山椒魚が体の増大で岩屋から出られないことに気付いたばかりの時に驚いて自責した。そして、

「いよいよ出られないといふならば、俺にも相当な考へがあるんだ。」

と呟く。けれども、次の地の文で「しかし、彼に何一つとしてうまい考へがある道理はなかつたのである。」と説明したように、「相当な考へがある」とは不可能に等しいのに、何故自分のわかりきった無用な事をあえて言ったりするのだろうか。それは勝ち気な性格から自分に不利な状況に負けまいという心理だと言えるだろう。

人間がいざ不幸に直面した時には逃避するのが常で、それは解脱への早道で、反射的な心理だからである。山椒魚も同然で、脱出する努力が無効である事実を自覚した当初も現実逃避的な心理があつた。このような心理を井伏は逆説的表現によって巧みに描いたのだ。

「小さな窓からのぞき見するときほど、常に多くの物を見ることはできないのである。」

岩屋を出て歩き回ったほうが小さな窓から覗き見をするより広大な視野が持てるのが常識にもかかわらず、井伏はあえて一見不条理な叙述をした。これについては須藤宏明氏の次のような透徹した見解を借りれば、明晰になる。確かに人は、小さな窓から外界を覗き見た時、実に多くの物を見たような錯覚に陥ることがある。すべてを見てしまったような気がする。だが、それは小さな窓という枠によって作られた小さな世界のすべてを見ているだけである。この論法こそ山椒魚が脱出できない事実を有利なように組み替えるに他ならない。山椒魚はこの屈曲した論法により作り上げられた世界に立脚し、現実逃避的な覗き見を肯定する。⁽²⁴⁾

このような逆説的表現は本文の他の個所にも見られる。

「彼は彼自身のことを譬へばブリキの切屑であると思つたのである。誰しも自分自身をあまり愚かな言葉で譬へてみることは好まないであらう。ただ不幸にその心をかきむしられる者のみが、自分自身はブリキの切屑だなどと考へてみる。たしかに彼等は深くふところ手をして物思ひに耽つたり、手ににじんだ汗をチョッキの胴で拭つたりして、彼等ほど各々好みのままの恰好をしがちなものはないのである。」

とあるように、不幸者は不幸であるが、最も自由に思うままに生きられる者でもあ

る。不幸であることを自認せざるを得ないが、物思いに耽ったりするのが自由にでき
恰も不幸が自由を齎らす良いことのようにと自分の心を慰める。

「目を閉じるといふ単なる形式が巨大な暗やみを決定してみせたのである。その暗
やみは際限もなく擴がった深淵であつた。誰しもこの深淵の深さや廣さを言ひあ
てることはできないであらう。——どうか諸君に再びお願いがある。山椒魚がか
かる常識に没頭することを軽蔑しないでいただきたい。」

もともと目を閉じれば何も見えないはずなのに、山椒魚は目を閉じると「巨大な暗
い深淵」が「見える」。しかもそれは「常識」であることをあえて強調する。明るい
現実が見えなければ、せめて果てのない暗い深淵が観賞できる。範囲が遙かに広大な
ことは明るくて、狭い範囲しか見えないよりはましである。以上、どれも逆説的表現
によって現実逃避的な心理を描く所である。悲惨な現実を論理的技巧で受容するのは
まだ真の受容に至っていないのである。

作品に沿って分析してみれば、目高や蝦や蛙などの登場がそれぞれ山椒魚の心情変
化を引き出し、強調する役目を演じていると考えられる。そして、これら目高などの
小動物は元来山椒魚の「食物」でもありうる。が、

「全く蝦くらみ濁つた水のなかでよく笑ふ生物はみないのである。」

とあるように山椒魚が自分より弱い者に嘲笑されたり、彼等と対抗したりしなければ
ならないのは山椒魚の悲しみを一層強く表したとも言えるだろう。

「なんといふ不自由千萬な奴等であらう！」

と目高達を嘲笑した山椒魚にとってこれがかえって大いに自嘲したことになる。目高
達が自分以外の孤独でない群衆を象徴するなら、この嘲笑が自分の孤独を際立たせる
にすぎない。目高達は群れで行動するが、岩屋の外の自由な世界に生きているのに対
して、山椒魚こそが「不自由千万」である。

「くつたくしたり物思ひに耽ったりするやつは、莫迦だよ。」

と身籠もる小蝦に得意げに言った山椒魚は自分が滅亡に近付いていくことを忘れたよ
うである。小蝦は山椒魚の思うように物思いに耽るとはかぎらない上に、子蝦という

新生を孕む希望的な存在である。岩屋が山椒魚の死にどころにあたるが、小蝦は生の象徴である。従って、小蝦の登場は山椒魚の岩屋から出られない絶望を引き出し、しかも生死の対照をすることによって、山椒魚の不幸の色彩を濃厚にした。

やがて山椒魚は苦しみに耐えられず、弱さを現わす。

「ああ神様、どうして私だけがこんなにやくざの身の上でなければならないのです？」と嘆く。そして他の小動物の活発で「自由」な光景を羨んで見ないほうがいいと気づき、目を閉じた。「覗き見肯定」に似た「巨大な暗い深淵の見える」自己の世界へ逃避した。しかしこのように自分の心を慰めても到底「ああ寒いほど独りぼつちだ！」と本音を吐く。

「悲嘆にくれてあるものを、いつまでもその状態に置いとくのは、よしわるしである。」ので、山椒魚は不注意で岩屋に紛れ込んだ一匹の蛙を出られないようにしたそれから両匹の動物は口論し続き、対立する。

新潮社版の新『山椒魚』は次のような場面まで定本と思われた『山椒魚』とは同じである。

「更に一年の月日が過ぎた。二個の鉱物は、再び二個の生物に変化した。けれど彼等は、今年の夏はお互に黙り込んで、そしてお互に自分の嘆息が相手に聞えないやうに注意してみたのである。」というところで終わる。

寒い冬に冷たい鉱物みたいな動物は夏の温暖でよりやわらかい生物に蘇った。しかし、心はまだ冷たいのである。依然として自分の正しさを主張して、意地を張る緊張状態が続いている。山椒魚が蛙をいじめるイメージにとどまると思う。筑摩書房版の『山椒魚』なら、その後には

「ところが山椒魚よりも先に、岩の凹みの相手は、不注意にも深い嘆息をもらってしまった。それは「ああああ」という最も小さな風の音であった。去年と同じく、しきりに杉苔の花粉の散る光景が彼の嘆息を唆したのである。

山椒魚がこれを聞きのがす道理はなかった。彼は上の方を見上げ、かつ友情を瞳にこめてたづねた。……」

云々と両匹の動物が和解をするような対話を加えて終わる。

では何故元来強く対立し合った両動物が「自然」に和解し合うようになったのか。

蛙が毎年杉苔の花粉のしきりに散る光景を見て嘆息するのは季節の移り変りに感触を得、自然と溶け合っていくうちに前より寛厚な気性になる。山椒魚もまた年月の流転につれて、不幸から齎らした悪性がだんだん消え、柔和な心持ちになったからのではないかと思う。川崎和啓氏も

「〈生誕→生育→成熟→死滅〉という、年毎に経めぐる自然の営為に自己を重ね合わせた精神にもたらされるものは、一切の葛藤やいらだちの放下であり、生あるものへのいつくしみや親和の情である。『山椒魚』でも二年間に及ぶ不毛な「口論」の背後では、両者のこのような〈成熟〉が奥深く進行していたと考えてよい（中略）〈成熟〉がそのまま相手への〈赦し〉につながるという心的構造は日本の伝統的な感性の中ではきわめて〈自然〉なものであって・・・」⁽²⁵⁾

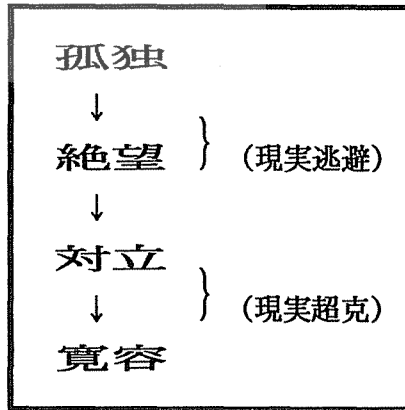
というような見解を示す。

運命を決める自然を受容できない場合は上述した山椒魚のように逃避したり、苦しんだりする。悲惨な運命となるのは自然の仕業とも言えるし、自分の不注意とも言えるので、悲惨な運命を与えてくれた自然をさえ受け入れられて、はじめて、他人若しくは自分を赦すことができる。蛙は山椒魚のくやしくてならない気持ちゆえ不条理な待遇を受けたという「自然」を受け入れて山椒魚を赦した。一方では、何の罪なく、ただ「淀みの水底から水面に、水面から水底に、勢いよく往来して山椒魚を羨ましがらせたところの蛙」を「よくない性質を帯びて来た」山椒魚がわざと閉じこめて、月日の立つにつれて蛙への不条理に気付いた。ゆえに、蛙との和解は自然を受容した上での他者或いは自分との融和である。羨ましがらせた蛙を寛容した時に、山椒魚も自責する精神的な岩屋から自己釈放した。

一方では、山椒魚が蛙を自分と同じ境地に追い詰めるのが山椒魚の悪い意地からか、蛙自身の不注意からかは別問題で、同じ岩屋にいて同じ運命におかれた二匹の動物はもはや同伴者となり運命共同体であると同時に、心情共同体でもありうる。故に山椒魚と蛙との意地を張るような対立は自我と他人或いは二人の自我の対立や矛盾と見做せる。自我と他人との対立は立場の違いによるが、二人の自我の矛盾は理想と現実或いは理性と感性のような対立による。それに、両者の和解は自然への受容や他人若しくは自分への寛容や赦しを象徴すると思われる。

総じて山椒魚の心情変化を図式で表現してみれば、次のようになる。

岩屋という現実



山椒魚は負けず嫌いで現実から逃避したく、あらゆる方法で自己の世界を保とうとしているし、苦しんだあげく蛙をいじめるようなことをする。ところが、蛙との対立はかえって山椒魚が現実を超克できたきっかけともなった。

井伏は『山椒魚』の前半で時にユーモラスな、時にアイロニカルな口調や逆説的な表現で、主人公の孤独と絶望を描きだす。後半では、蛙とのドラマチックな場面や対話で対立の緊張感を盛り上げる。そして、自然な時間の経過でお互いの寛容や赦しの雰囲気を作りだす。もちろん本ドラマでは主人公の心情変化に即して言えば山椒魚の寛容で幕を閉じているが、最後の和解の場面では蛙も欠かせない重要な脇役を演じていることを付言しなければならない。

四、

処世態度を三つのレベルに大別して、

- 1 現実の不幸に苦しむ。
- 2 寛容や赦しなどで苦しみや悲しみを緩和する。
- 3 現実世界を離れた宗教的な悟りをする。

というように仮定する。

1.の段階は人の世の常態である。2.の段階は苦しみを味わってからの処世知恵で、安らかに人の世に生きる上の重要な方法である。1.より解放された自由な心理空間に至る。ただその自由は不幸が繰り返さない時、若しくは一定の時間が必要だなどというような条件が成立する場合のみ得られる一種の相対的な自由である。3.は現実を看破し、世の中の一切を見捨てる。世の中にいながら、超然たる別世界にいる。悲しみの含む現実より完全に束縛されず、絶対自由の境地に至る。

この仮定の観点から改作後（新潮社版）の『山椒魚』を見れば、山椒魚がただ出られないという「絶対的な運命」を覚悟しただけで、第一レベルに止まると思われるが、改作前の山椒魚は岩屋という現実から離れられないが、第二レベルの寛容や赦しに当たり、一種の精神的な自由で、田中実氏のいう「〈他者〉という〈出口〉⁽²⁶⁾というよりも〈赦し〉という〈出口〉だと言える。ところで、チェホフの『賭け』の場合は弁護士の自由が幽閉状態からの身体解放だけではなく、現実を超越した第三レベルの宗教的な解脱であると考えられる。

従って、『山椒魚』は悟りでもなく、現実には打ち倒れられた悲しみでもなく、潤いのある感性に満ちた「赦しの寓話」である。「赦し」によって現実超克する作品である。動かしがたい現実の中で如何に「破滅することなく自己を生かしていくか」、不幸の中に「その内なる屈託をどう減じていくか」という問いを解く鍵は正に「赦し」にある。

苦しみを緩和することができ、人生に潤いを与えられるような寛容や赦しが宗教家でなくても可能である以上は、むしろ改作前の『山椒魚』が賛成できると思われる。

『山椒魚』では絶対的な自由が得られなかったかもしれないが、それは到底少数の人間しか至らない境地である。この作品は現実の悲しみに喘ぐよりも自然の力を認め、より寛大な目で世の一切を見つめる示唆を与え、〈赦し〉イコール現実という岩屋の〈出口〉のような可能性を提供した。

- (1)「作家に聞くー井伏鱒二」(『文学』、昭和27・9) p86
- (2)亀井勝一郎 「山椒魚」について(『山椒魚』、新潮社、平成4・5)
- (3)佐藤嗣男 『表現学大系 近代小説の表現 五』(教育出版センター、平成2年10月) p107
- (4)『井伏鱒二自選全集 第七巻 半生記』(新潮社、昭和61)
- (5)涌田 佑 『井伏鱒二ー作家の思想と方法』(明治書院、昭和61) p65
- (6)松下 裕訳 『チェホフ全集 4』(筑摩書房、1987、11)より要約
- (7)佐伯彰一 「井伏鱒二の逆説」(『井伏鱒二・深沢七郎』、有精堂、昭和52)
- (8)涌田 佑 前掲書 p86, 87
- (9)野坂昭如 「窮鼠のたか跳び」(『週刊朝日』、昭和60、10、25)
- (10)古林 尚 「偏執狂めいた加筆訂正魔」(『週刊読書人』、昭和60、10、10)
- (11)『朝日新聞』 昭和60、10、26 夕刊
- (12)三好行雄 「作品をどう読むべきか」(『国文学ー解釈と教材の研究』1989 34巻8号)
- (13)長谷川泉 「眷恋旧作の行方」(長谷川泉など編 『井伏鱒二研究』 明治書院 平成二年三月)
- (14)松本鶴雄 『井伏鱒二ー日常のモチーフ』(沖積社 昭和63、6)
- (15)田中 実 「<他者>という<出口>ー『山椒魚』」(『国文学ー解釈と鑑賞』1990年9月 55巻9号)
- (16)鈴木貞美 「非情の完成ー『山椒魚』の改稿をめぐる」(「新潮」1986年 83巻2号)
- (17)紅野敏郎 「井伏鱒二 山椒魚」(『国文学ー解釈と教材の研究』1987年 32巻9号)
- (18)鈴木貞美 前掲書
- (19)中村光夫 「井伏鱒二論」(『日本文学研究資料叢書 井伏鱒二・深沢七郎』有精堂、昭和52年)

- (20)石崎 等 「代表作ガイド」(小沼 丹 『日本の作家 16 井伏鱒二』)
小学館 1990、12)
- (21)涌田 佑 前掲書 p15
- (22)東郷克美 「井伏鱒二の形成」(『国文学—解釈と鑑賞』1985、4月)
- (23)橋本峰雄 『「うき世の思想」』(講談社、昭和50年)
- (24)須藤宏明 「井伏作品における諦観」(長谷川泉など編 『井伏鱒二研究』
明治書院 平成2年3月)
- (25)川崎和啓 「『山椒魚』の成立と『賭け』—昭和六十年版『山椒魚』への道」
(『昭和文学研究』19集、1989、7、25) p28
- (26)田中実 前掲書

※付記 本文の引用は『井伏鱒二全集』第一巻(筑摩書房、昭和39年9月)
に拠った。

(淡江大学日文系 講師)